普通

第1回

国語

大森学園高等学校　普通科

第1回　2月10日

令和7年度　入学試験問題

国語

注意

1　指示があるまで開いてはいけません。

2　問題用紙にも受験番号を算用数字で記入しなさい。

3　試験時間は**50分**です。

4　問題は一から三までで1ページから18ページにわたって印刷してあります。

5　解答はすべてマークシートで答えるようになっています。この問題用紙の裏に書いてある解答用紙記入上の注意をよく読んで答えなさい。

6　解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。

受験番号					

一、次の文章を読んで後の問に答えなさい。設問の都合で一部省略した箇所がある。

希望に燃えるフリーターがしばしば口にするのは「夢の追求」であり、「自分の可能性」である。だが、何より注意しなければならないのは、①妥協のない研鑽の成果として、真に優れた芸術作品が創れたとしても、必ずしも②職業的成功と結びつくとは限らないということだ。才能があるからといって、それで食えるとは限らない。優れているからこそ、読者に理解されず、売れないことだって大いにあり得る。実際、純文学[注1]には「売れない」ことを「文学」的には名誉であるかのように見なす傾向さえある。ただ、食えないだけのことだ。

夏目漱石は、この問題に対して、かなり自覚的だった。漱石は明治四十四年八月十三日に、明石で『道楽と職業』と題する講演を行ったが、その主題はまさに、価値と対価の乖離[注2]だった。ようするに、すべてを経済的な価値で計る近代社会において、仕事といきがいの兼ね合いをどうつけるかを考えていたのである。

ここでいう道楽について、漱石は「道楽といいますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、または何か花柳[注3]社会へ入ったりする、俗に道楽息子といいますね、ああいう息子のする仕業（しわざ）、それを形容して道楽という。けれども私のここでいう道楽は、そんな狭い意味で使うのではない、もう少し広く応用の利く道楽である」と述べている。現在好んで用いられている言い方でいうなら、それは「生きがい」「自分らしさ」ということになるもののことだ。

これに対して「職業」のほうは、端的に経済的報酬のある仕事を指す。

漱石はまず「現今の世の中では職業の数は煩雑（はんざつ）になっている」という。しかし、③大学を出た秀才でも、自分にあった職業を見つけられないのが現代だ、と述べている。

――天下に職業の種類が何百種何千種類あるか分からないくらい④ブンプ配列されているにかかわらず、どこへでも融通が利くべきはずの秀才が懸命に駈（か）け廻（まわ）っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなかない。三ヶ月も四ヶ月も遊んでいる人があるのでこれは気の毒だと思うと、あにはからんや既に一年も二年もボンヤリして下宿に入って為すこともなく暮らしているものがある。[注4]

これなどは、まったく今時のフリーターもしくはプータローの姿だ。では、どうしてこのような事態が起こるのか。漱石はその原因を次の二つの点に要約している。

まず第一は、社会が「開化」して複雑になるのにしたがって、学問は専門化し、職業は細分化し、そしてひとつの「職業」を選択することによって切り捨てなければならない「その他」があまりに大きくなったために、決定するのが困難になったということ。つまり、昔はひとりの人間がしなければならない作業が多かった一方、それだけに自分が何をしているかが明瞭に認識できた。ところが進歩した社会では、自分のやっている仕事が社会そのものとどうかかわっているのかが分かりにくくなり、仕事の達成感やカタルシス[注5]が失われてしまった。そうした状況下では、人は働けば働くほど、⑤疎外感が深まることになる。

そして第二に、これが非常に問題なのだが、職業というのは、結局は「人のためにする」仕事にすぎないという点。漱石は労働の他者性を次のように説明する。

人のためにするという意味を間違えてはいけませんよ。人を教育するとか導くとか精神的にまた道義的に働きかけてその人のためになるという事だと解釈されるとちょっと困るのです。人のためにというのは、人の言うがままにとか、欲するままにといういわゆる卑俗[注6]の意味で、もっと手短かに述べれば人の御機嫌を取ればというくらいの事に過ぎんのです。人にお世辞を使えばといい変えても差支(さしつかえ)ないくらいのものです。

このような「他人のため」を離れて、自分自身の希望であるような仕事は、ないのだろうか。

⑥『それから』には、平岡のほかにもうひとり、代助の同級生が登場する。翻訳家を業としている寺尾という男だ。彼の立場を、⑦オクソクを交えてまとめると、次のようになる。東大を卒業した知的エリートである寺尾は、しかし会社にも官庁にも勤めようとは思わなかった。教師になるのもいやだった。彼は、そうした社会の歯車となる生き方を嫌い、作家になりたいと考えている。そして、そのために今はフリーター生活をしているのである。

とはいっても、いちおうは大学教授や出版社（に就職している先輩・同級生）にもコネがあるから、肉体労働をしたり、マクドナルドでバイトをする必要はなく、翻訳をやって暮らしを立てている。

もちろん、あまり金にはならない。代助からは、かなり借金をしている。というか、はじめから返す気はないのだから、借金という

よりはカンパである。ついでに、翻訳で分からないところがあると、聞きに来る。

そういうわけだから、彼が「金を得るための仕事」にやっている翻訳への態度は、いい加減なところがある。自分の小説を書く時間を削って、翻訳をするのを、下らない雑用をさせられているくらいに感じているからだ。

だから彼の仕事ぶりは、次のようなしだいになる。

「分らない所はどうする」と代助が聞いた。

「なにどうかする。誰に聞いたって、そう善く分りゃしまい。第一時間がないから已を得ない」と、寺尾は誤訳よりも生活費の方が大事件である如くに天から極めていた。[注7]

相談が済むと、寺尾は例によって、文学談を持ち出した。不思議な事に、そうなると、自己の翻訳とは違って、いつもの通り非常に熱心になった。代助は現今の文学者の公けにする創作のうちにも、寺尾の翻訳と同じ意味のものが沢山あるだろうと考えて、寺尾の矛盾を可笑しく思った。[8]

プロの作家になるためには、まず、生活に足りるだけの金を、継続的に原稿を売って稼ぎ続けると覚悟を決めなければならない。もちろん作家は、自分の書きたいものを書くのだが、それは同時に編集者が「売れる」と判断してくれ、読者が「面白い」と受け入れてくれるものでなければならない。

また、作家となって仕事として書くからには、自分で書きたい物を勝手に書くのではなく、注文に応じて書かねばならない。そうでなければ金にはならない。

作家に力量があって、それを編集者が認めていれば、内容にまでは口を挟まないだろうが、枚数の制限や締め切りは設定されている。厳密な意味でいうと、プロ作家にとって、「自由に書く」ということは、もはやあり得ない。

「生きがいとしての仕事」は、そもそも大きな矛盾をはらんでいる。報酬を目的とした「仕事」は、本来、顧客のためにする行為である。【　　】。また医師は、生体実験をするためではなくて、治療を目的にして患者の体にメスを立てるのでなければならない。自身の生きがいではなく、他者への奉仕を前提にしているからこそ、はじめて報酬が期待できるのである。

しかし漱石は、『道楽と職業』のなかで、次のように言い切っている。

私は芸術家というほどのものでもないが、まあ文学上の述作をやっているから、やっぱりこの種類に属する人間といって差支ない

でしょう。しかも何か書いて生活費を取って食っているのです。手短にいえば文学を職業としているのです。けれども私が文学を職業とするのは、人のためにするすなわち己を捨てて世間の御機嫌を取り得た結果として職業としていると見るよりは、己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心術の発現の結果が偶然人のためとなって、人に気に入っただけの報酬が物質的に自分に反響して来たのだと見るのが本当だろうと思います。もしこれが天から人のためばかりの職業であって、根本的に己を枉げて始て存在し得る場合には、私は断然文学を止めなければならないかも知れぬ。

この講演の前半で、漱石は「報酬」は「仕事」が「人の為」になっているから支払われるのだ、と述べている。もちろん、漱石はそのことを自覚している。

幸いにして私自身を本位にした趣味なり批判なりが、偶然にも諸君の気に合って、その気に合った人だけに読まれ、気に合った人だけから少なくとも物質的の報酬、（あるいは感謝でも宜しい）を得つつ今日まで押してきたのである。いくら考えても偶然の結果である。

「偶然」に「道楽」が「報酬」に結びついたとしても、その「偶然」の継続的獲得に期待して職業を決定するとすれば、それはあまりに迂闊であろう。とすれば、現に「文学」を「仕事」としている⑨漱石のこの言葉には、ある種の欺瞞[注8]、もしくはパラドクス[注9]が潜んでいると見なければならない。

生活費を得るための職業として文学を選んでいる以上、彼（別に漱石とは限らない）は売れるものを書かなくてはならない。それがエンターテイメントとして大部数売れることを目的にした場合はもちろん、選良[注10]たる少数の読者を対象にした高踏的[注11]文学であっても、商業ベースに乗せる以上は、最低部数を設定して考えなければならない。

この構図は、現代も明治末期も基本的には変わっていない。もちろん漱石は、そんなことは百も承知していた。彼はその初期作品『琴のそら音』のなかで、当時の大ベストセラーである村井弦斎[注12]の『食道楽』に⑩ゲンキュウするなど、商品としての本に窮めて敏感な人でもあった。

だが、漱石は「この偶然が壊れた日には何方本位にするかというと、私は私を本位にしなければ作物が自分から見て物にならない」

と述べ、さらに「反響が物質的報酬となって現れて来ない以上は餓死するよりほかに仕方がない」とまで述べている。

漱石が自身の文学的成功を「偶然」の産物にすぎないとみなすのは、謙遜(けんそん)してのことではない。むしろ逆で、強い自負心のあらわれである。

漱石は自分の作品が優れていると自負していた。だからこそ、それを理解できる読者がどれくらいいるかを心配していたのである。良い作品を書いたから報酬面で報われるとは限らない。そこに生きがいとして仕事をする者のジレンマ[注13]があった。

しかしあくまでも他人本位ではなく自己本位で仕事をしようとする漱石は、読者に迎合するような意味での作品についての妥協を、断固として拒否する。このように、自己本位の営為は、他人本位の仕事以上に深く厳しい職業倫理につらぬかれた、誠実な仕事なのである。

（長山靖生『漱石の御利益』）

注1　純文学・・・「娯楽性」よりも「芸術性」に重きを置いている文学の総称。　注2　乖離(かいり)・・・不本意にも離れ隔たっているさま。

注3　花柳社会・・・芸者や遊女の社会。　注4　あにはからんや・・・思いがけないことに。

注5　カタルシス・・・心に存在する重苦しい気分が浄化されること。

注6　卑俗(ひぞく)・・・いやしく俗っぽいこと。　注7　天から・・・最初から。　注8　欺瞞(ぎまん)・・・あざむきだますこと。

注9　パラドクス・・・一見すると真理に背いているようで実は一面の真理を言い表している表現。　注10　選良たる・・・選ばれた優れた。

注11　高踏的・・・世俗を離れて気高く身を保っているさま。　注12　村井弦斎・・・明治から大正にかけて活躍したジャーナリスト。

注13　ジレンマ・・・二つの相反する事柄の板挟みになること。

問1 ――線④「ブンプ」・⑦「オクソク」・⑩「ゲンキュウ」を漢字に直した場合に、同じ漢字が使われている熟語を次の中から選んで、その記号をそれぞれ解答欄にマークしなさい。解答番号は④が1、⑦が2、⑩が3。

④ ブンプ

ア 薬剤をサンプして害虫を駆除する。　イ 海外旅行をしてケンブンを広める。

ウ 資料にテンプされた領収書を確認する。　エ 高校ではブンゲイ部に入部した。

⑦ オクソク

ア 明日はヨソクの困難な風が吹くらしい。　イ オクマン長者なんて夢物語だ。

ウ 猫がお昼ご飯をサイソクしている。　エ 大雨で多くのカオクが浸水した。

⑩ ゲンキュウ

ア ルールにゲンカクさが要求される武道。　イ シキュウの用件があって訪れた。

ウ 日本は人口がゼンゲンしている。　エ 責任の所在をツイキュウする。

問2 ――線⑥「『それから』」は夏目漱石の前期三部作と言われる作品群の二番目に位置する小説だが、一番目と三番目に成った作品の組み合わせとして適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は4。

ア 吾輩は猫である・草枕　イ 三四郎・門　ウ 彼岸過迄・こころ　エ 坊っちゃん・虞美人草

問3 【　　】に入る表現として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は5。

ア 教師は自己の研究時間を割いて学生に知識を与える

イ 弁護士は事実を構成し直してでも加害者を救済する

ウ 裁判官は真相究明に尽力しながら公正な審判を下す

エ 牧師は自己の家族を犠牲にして彷徨(さまよ)う者を救済する

問4 ――線①「妥協のない研鑽の成果」とあるが、このことの説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は6。

ア 編集者の目論(もくろ)む高い水準と読者の感じる「面白さ」の基準とを両立させ、そのうえで洗練させた芸術家の創造。
イ 編集者の意図や読者の興味・関心を知りつつ、それを無視して敢(あ)えて売ることを度外視して制作した芸術作品。
ウ 編集者の考える「売れる」基準や読者の感じる「面白さ」の基準に左右されずに成し遂げた芸術家独自の創造。
エ 読者の興味・関心を理解し、そのうえで編集者の指示に従いながら、売れることを前提に完成させた芸術作品。

問5 ――線②「職業的成功と結びつく」とあるが、これを簡潔に言い換えた表現として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は7。

ア 生活費が転がり込んでくる。　イ 自己の生きがいが感じられる。
ウ お金なしでも生きていける。　エ うまくて高価なものが食える。

問6 ――線③「大学を出た秀才でも、自分にあった職業を見つけられない」とあるが、その理由についての説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号をマークしなさい。解答番号は8。

ア 自分が専門的に身に付けた能力や技術を活かせない仕事が多いから。
イ 自分の誇りを捨てて他者本位にしなければならない仕事が多いから。
ウ 大学で学んだことだけでは対応できないほど技術が進んでいるから。
エ 大学での学問が影響して仕事選びでも妥協できなくなっているから。

問7 ――線⑤「疎外感が深まる」とあるが、そうなる理由の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号をマークしなさい。解答番号は9。

ア 人のご機嫌を伺ったりお世辞を述べたりするだけの仕事を続けると、その下心のあるところを周囲の敏感な顧客に見抜かれてしまい、孤立無援の状態に陥るから。

イ 人のご機嫌を伺ったりお世辞を述べたりする仕事を続けていると、自己の意思としてやりたい仕事の性質からますます遠ざかり、無力感を味わう羽目になるから。

ウ 学問の専門化や職業の細分化によって高度化した社会では、職に就いても受け持つ仕事の性質が人それぞれで異なっているため、人間関係がうまく作れないから。

エ 学問の専門化や職業の細分化によって高度化した社会では、職に就いてもその仕事に全的に関わることができないため、自分と社会との接点が見出しにくいから。

問8 ――線⑧「寺尾の矛盾」とあるが、『それから』の代助は寺尾のどこに矛盾を感じているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は10。

ア 報酬を得られる仕事はもともと顧客至上主義の営為であるはずなのに、顧客のための翻訳業をいい加減に済ましているところ。

イ 翻訳の仕事で誤訳があったとしても、読者に指摘されることもなく報酬だけは継続的に入ってくると高をくくっているところ。

ウ 報酬のためには正確な翻訳は必須のはずなのに、時間がないことを理由にでたらめな翻訳ばかりで顧客をだましているところ。

エ 報酬は自分の誠実な仕事によって得られるはずなのに、友人の英語力に頼りきりで翻訳への努力をいっさい欠いているところ。

問9 ――線⑨「漱石のこの言葉」とあるが、「この言葉」から筆者が類推した漱石の考え方の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は11。

ア 漱石は、自分の作品が芸術的に優れていることに自覚を持ち、それによって報酬が得られることは偶然に過ぎないと謙遜し、相手を欺(あざむ)いてでも本音は隠さなければならないと考えていた。

イ 漱石は、自分の作品が娯楽的に優れていることに疑いを持ち、それが偶然であっても自分の実生活は成り立っているのだから、このままその「偶然」を頼りに生きていこうと考えていた。

ウ 漱石は、自分の作品が芸術的に優れていることに誇りを持ち、それだからこそ逆にそれを理解でき、自分に生活上の収入を得させてくれる読者がいることは偶然でしかないと考えていた。

エ 漱石は、自分の作品が娯楽的に優れていることに自信を持ち、とはいえそれを読んで自分に実生活上の報酬を得させてくれる読者がいることを偶然と呼ぶことで謙遜しようと考えていた。

問10 本文の内容を説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は12。

ア 自分本位の芸術活動は他者本位のそれに比べて妥協の許されない誠実な仕事で、決して儲かることはない。

イ 自分の作品が評価されるのは、偶然それを理解する読者が存在するからだと漱石はその幸運を喜んでいる。

ウ 漱石は、読者のレベルに合わせて自身の優れた作品の質を下げてまで報酬を得ようとは考えていなかった。

エ 人のためにする仕事で報酬が入ってこなくなったら、餓死することも選択肢の一つだと漱石は考えている。

二、次の文章は、作者である井上靖自身の足跡を描いた『あすなろ物語』の一節であり、主人公の梶鮎太が九州の大学に進んだ後、恋慕する佐分利信子夫人を思いながら東京と行き来する学生時代の一時期を描いている。佐分利夫人は旧家に嫁いで夫に早逝(注1)された女性であり、大沢、金子、木原はともに鮎太の友人、英子と貞子の両人は佐分利夫人の義妹である。よく読んで後の問に答えなさい。設問の都合で一部省略した箇所がある。

大沢に次いで檜(ひのき)であることをリッ証(①)したのは金子であった。

日支事変[注2]が勃発すると同時に、金子は召集令状を受取った。東京駅に郷里の名古屋へ帰る金子を、佐分利夫人と貞子、それに木原と鮎太は多数の彼の学友たちの中に混じって送った。

戦争が始まって半月も経たないうちの応召[注3]だったので、見送りは華やかだった。学生たちのバンドが、駅のホームで軍歌を奏し続けていた。学生服に白い襷をかけた金子は、誰の眼にも強そうな兵隊に見えた。

「強そうね。でも余り無茶をしては駄目よ」

信子が言うと、

「大丈夫です。生れつき臆病だから、背後の方で小さくなっています」

そう言って、

「奥さん、元気で、いつまでもあの家にいて下さい。冬、よく風邪をひくでしょう。気をつけないと不可ません」

しんみりと彼は言った。

「まるで、私の方が戦争に行くみたい」

信子は明るく笑ったが、鮎太は傍で聞いていて、②そんな金子を美しいと思った。自分と金子の二人が、佐分利夫人を争っても、到底自分は彼の敵ではあるまいと思った。

彼を送ってから一カ月もしないうちに、金子二等兵は上海郊外のクリークの戦闘で華々しい戦死を遂げた。

彼の戦死の記事はA新聞社の特派員に依って、詳細に報道されて、A紙の社会面を賑わした。

決死隊に選ばれた彼は、右手を対岸にかけたまま、機銃の一斉射撃を浴び、左手を二回高く突き上げて、敵味方【　A　】視の中で水中に没したということであった。

彼の戦死の報が新聞に載った時、木原と鮎太は佐分利家を訪ねた。珍しく二人は信子の居間に通された。

机の上に、金子の小さい写真が飾られ、それが黒いリボンで結ばれてあった。そして【　B　】には、「この夏は血も汗もただに弁えず」という彼が出立の日に遺して行ったという短冊がかけられ、その前に線香が焚かれてあった。

何もかも、鮎太には意外だった。彼が自分の写真を佐分利夫人のところに遺して行ったということも、（　a　）彼の一面であったが、鮎太は少しも嫌な気はしなかった。

また彼が俳句を作るということは知っていたが、このように重々しい句が、彼の③のほほんとした人柄から生み出されているとは知ら

なかった。句の意味は多分に独りよがりのようであったが、鮎太は彼自身の勝手な見方で、その句の意味を考えていた。金子の佐分利夫人に対する気持がいつか鮎太などは遠くに置いてけぼりにして、血も汗も弁えぬ烈しいものになっていたかと思った。

そしてそうした金子の気持を、佐分利夫人はちゃんと見抜いていたのではなかったか。いつか、英子の送別会の時、金がないので紅白の菱餅[注4]しか買えなかったと彼は言ったが、あるいは金がないのではなく、彼は多くの贈り物の中から、それをわざわざ選んだのかも知れなかった。そんな彼の誠実さが今更のように鮎太には感じられた。

鮎太は涙が双の瞳から溢れて来るのを停めることは出来なかった。一人の友のために彼は手放しで泣いた。

「泣いたって仕方がないわ。それより金子さんという【　C　】のために乾盃しましょうよ」

そう言って、信子は女中に日本酒を運ばせて来た。そして外出から帰って来た貞子も加えて、四人で、金子の写真の前で、決して酔うことのない酒を飲んだ。

その【　D　】、貞子の作品が帝展[注5]に入選した。初入選の氏名の中に貞子の名を発見すると、鮎太は上野の美術館に彼女の絵を見に行った。

会場の真中頃に佐分利貞子の、隣家の洋館の側面を描いた絵が並んでいた。

葉鶏頭[注6]が、灰色の色調の建物の壁の前で、燃えるように赤かった。素直な感じの絵だった。何事にも控えめな彼女のおとなしい性格がそこには如実に現われていた。鮎太がそこに立っていると、信子と貞子がやって来た。多勢の入場者の中で、二人の麗人[注7]は遠くからでも際立って目立っていた。

「貴女も到頭檜になりましたね」

と、鮎太が言うと、

「まだですわ、檜の子ぐらい」

貞子は謙遜して言ったが、さすが（　b　）、自分の作品の前に立って、それをじっと見詰めていた。

その日、鮎太は初めて佐分利夫人と二人だけで上野公園を歩いた。貞子が絵の先生の家へお礼に行くと言って、一人先きに帰ったからである。

小春日和の気持のいい日であった。鮎太は眩しい気持で信子の右側に添った。その時、歩きながら、信子は、

「木原さんはこんど伊太利へ交換学生で行くかも知れないんですって、二、三日前、報告に来ましたわ」

それは鮎太には初耳だった。
「そうすると、彼も到頭檜と言うことになるかな」
と鮎太は言った。
「そう大沢さんも、金子さんも、木原さんもみんなどうやら檜ですわね」
「貞子さんも、英子さんも」
「あの人たちは、まだ檜の子」
「僕だけかな」
「何が？」
「翌檜なのは！」
「だって、⑥貴方は翌檜でさえもないじゃありませんか。翌檜は、一生懸命に明日は檜になろうと思っているでしょう。貴方は何になろうとも思っていらっしゃらない」
言われてみれば、その通りであった。鮎太は何になろうとも思っていなかった。親からの仕送りで、毎日毎日を、のんべんだらりと、怠惰に送り暮しているに過ぎなかった。哲学書を⑦耽読していると言っても、それで学者になれるわけでも、それに依って生活の【　E　】が得られるわけでもなかった。
一生何をやろうと言う当てもなかった。そろそろ卒業論文に取りかからなければならぬ時期だったが、それさえも億劫になっていた。
翌檜でさえないと言う信子の言葉は、鮎太には労わりのこもった優しいものに聞えた。彼の劣等意識を、信子はそっとかばってくれているようであった。
広小路の方へ降りる坂の途中で、
「でも何かなさらないと、人間不可ないんではないですか、どうして、そんな暗い顔ばかりしていらっしゃるの」
「暗い顔をしていますか」
鮎太は自分が暗い顔をしているとは思っていなかった。
「気持をふっ切って、外国へでもどこへでも行く気持におなりになったら？」

「外国へなんか、第一金がありませんよ」
「お金なんか！」
（　　c　　）と思っていると、
「貞子が、貴方となら結婚していいんですって！　自分の仕事を理解してくれそうな気がするんですって」
鮎太は顔を上げて、信子の顔をみた。彼がこれほど真直ぐに信子の顔を見詰めたことは、これまでに一度もなかった。鮎太はここ何年かの信子への思慕が、それはそれなりに、木原や金子や大沢のそれに較べて、それに勝るとも決して劣るものとは思っていなかった。
鮎太は⑧ホッ作のように可笑しさが込み上げて来るのを感じた。軽く声を出して笑った。笑いはとまらなかった。
「どうなさったのよ、嫌な方」
「可笑しいんです」
「何が？」
「何もかもが」
笑いがとまると、鮎太は用事を思い出したと言って、信子に別れて、⑨行先きを確かめずに真先きに来た市電に乗った。

注1　早逝・・・早世に同じ。早くに亡くなること。　注2　日支事変・・・日本と中国の間の紛争のこと。
注3　応召・・・召集に応じて軍務に就くこと。　注4　菱餅・・・菱形に切った餅。子どもへの愛情や願いを形にしたもの。
注5　帝展・・・明治末期から昭和の戦前期にかけて存在した官設公募美術展。　注6　葉鶏頭・・・植物の名称。
注7　麗人・・・美しい女性のこと。

問1　――線①「リッ証」・⑧「ホッ作」のカタカナ部を漢字に直した場合、その漢字と熟語関係を作れない漢字を次の中から選んで、その記号をそれぞれ解答欄にマークしなさい。解答番号は①は13、⑧は14。

①　ア　孤　　イ　中　　ウ　建　　エ　旋　　⑧　ア　足　　イ　輝　　ウ　心　　エ　起

問2 ――線③「のほほんとした」・⑤「如実に」・⑦「耽読している」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、その記号をそれぞれ解答欄にマークしなさい。解答番号は③は15、⑤は16、⑦は17。

③ のほほんとした

ア 緊張感のない　イ 危機感のない　ウ 気楽で執着のない　エ 大ざっぱな

⑤ 如実に

ア やや大げさに　イ 少し遠回しに　ウ まずまず明確に　エ ありのままの状態で

⑦ 耽読している

ア 夢中で読んでいる　イ 研究のために読んでいる　ウ 選び読みをしている　エ 本を収集している

問3 【A】・【B】・【C】・【D】・【E】に入る漢字一字の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は18。

ア A 看 B 柱 C 神 D 冬 E 金　イ A 観 B 棚 C 宝 D 夏 E 場

ウ A 監 B 壁 C 仏 D 春 E 糧　エ A 環 B 床 C 檜 D 秋 E 資

問4 （a）・（b）・（c）に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は19。

ア a 今では懐かしく思い出される　b 満面の笑みを浮べ　c 何のことだろう

イ a 嘗(かつ)てはこそこそやっていた　b 自画自賛の顔つきで　c 嫌な予感がする

ウ a ちょっと信じられぬ　b 悦(よろこ)びを包み匿(かく)せないで　c 変なことを言う

エ a にわかには理解し難い　b いかにも自慢げな様子で　c 裕福そうな人だ

問5 ――線②「そんな金子を美しいと思った」とあるが、鮎太がこのように感じた理由の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は20。

ア 出兵への不安や恐怖に気付かれぬよう、佐分利夫人に対する一方的な愛を思いを込めて表現しているから。
イ 出兵への自己の思いを抑制し、佐分利夫人への言葉に打算のない純粋な愛を込めているように感じたから。
ウ 出兵することを意気に感じている姿勢が明白であるものの、佐分利夫人を気遣うことも忘れていないから。
エ 出兵することを待ち望む様子がありありと伺え、佐分利夫人への思いまで飾ることなく表現しているから。

問6 ――線④「金子の気持」とあるが、鮎太の感じる金子の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は21。

ア 我が身を顧みずに戦う愛国心
イ 佐分利夫人への手前勝手な好意
ウ 弱さを打開するための克己心
エ 自己の生き方を信じ貫く誠実さ

問7 ――線⑥「貴方は翌檜でさえもないじゃありませんか」とあるが、この佐分利夫人の言葉を鮎太はどう受け止めたのか。その説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は22。

ア 的を射た言葉に納得するも、気力を失っている自分を慰め、挽回の可能性を示唆してくれているように感じている。
イ 哲学の分野で世に出ようとする自分には合点がいかないが、後押ししてくれる言葉と受け取って反論は避けている。
ウ 卑屈な自分を批判する言葉に落胆し、労わりの言葉だとは理解できても劣等感を克服するのは難しいと感じている。
エ 何に対しても積極的になれない自分に、資金援助までしようとする佐分利夫人に感謝しつつも大いに恐縮している。

問8 ――線⑨「行先きを確かめずに真先きに来た市電に乗った」とあるが、この時の鮎太の状況の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は23。

ア 佐分利夫人と貞子とを心の中で自分なりに比較し、自分の将来をどちらに委ねるべきか思案して気も漫ろな状況。
イ 佐分利夫人への恋を断念した今、行くべき具体的な場所も将来の展望も共に見出せないことを憂慮している状況。

ウ　佐分利夫人から才能の不足を暴露されて落胆し、自分の前途は有望だという確信が消えて何も考えられない状況。
エ　佐分利夫人への恋があっけなく破れ、自分の生き方に虚しさを覚えて早くその場を立ち去りたく思っている状況。

問9　この文章の内容について述べたものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は24。

ア　登場人物は、あすは檜になろうと念じながら生きる「あすなろ（翌檜）」の木に託して描かれ、それぞれが希望に向かって悪戦苦闘しているが、戦死してしまった金子は翌檜でさえなくなってしまった。
イ　登場人物は、あすは檜になろうと念じながら生きる「あすなろ（翌檜）」の木に託して描かれているが、友人たちが檜になるために行動しているのに対し、鮎太は現実の中で悶々（もんもん）としながら生きている。
ウ　登場人物中の男性は佐分利夫人に思慕を抱いてお互いに火花を散らす展開を見せるが、その他の友人は自分の夢を追いかける途中で見切りをつけるものの、鮎太だけは煮え切らずに右往左往している。
エ　登場人物中の男性は佐分利夫人に思慕を抱いてもお互いに知られないように振る舞うが、戦死した金子のその思いを察知するや否や、鮎太を除く他の仲間は思いを吹っ切って檜を目指して歩み始めた。

三、次の文章は『宇治拾遺物語』の一節である。よく読んで後の問に答えなさい。設問の都合上、表記を改めた箇所がある。

今は昔、唐①に、孔子、道を行き給ふに、八つばかりなる童あひぬ。孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽注と、いづれか遠き」と。孔子②いらへ給ふやう、「日の入る所は【　A　】。洛陽は【　B　】」。童の申すやう、「日の出（い）で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ」と申しければ、孔子、③かしこき童なりと感じ給ひける。「孔子には、かく物問ひかくる人もなきに、④かく問ひけるは、⑤ただ者にはあらぬなりけり」とぞ人いひける。

注　洛陽（らくやう）・・・中国古代の九つの王朝で首都となった都市。

問1　――線①「唐」の読み方と意味について説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は25。

ア　「もろこし」と読み、孔子の生まれた「魯（ろ）の国」のことである。
イ　「もろこし」と読み、日本から見ると「中国」の代名詞である。
ウ　「から」と読み、日本では遣唐使で知られた「唐の国」である。
エ　「から」と読み、日本から見て今の「中国大陸」のことである。

問2　――線②「孔子いらへ給ふやう」の現代語訳として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は26。

ア　孔子がお答えなさることには　　イ　孔子が聞き返すことには
ウ　孔子がお答え申し上げるには　　エ　孔子が聞き返して差し上げることには

問3　【　A　】・【　B　】に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は27。

ア　A　見ゆ　B　見えず　　イ　A　見えず　B　見ゆ
ウ　A　近し　B　遠し　　エ　A　遠し　B　近し

問4　――線③「かしこき童なりと感じ給ひける」とあるが、孔子がこのように感じた理由の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は28。

ア　定説とは対照的であるが、それを認めざるを得ないような画期的な見解を提示しているから。
イ　一般論と乖離しているものの、いかにも定説が誤りであるかのような根拠を示してくるから。
ウ　結論としては誤っているものの、自分の考えを根拠を示しながら理路整然と述べているから。
エ　科学的根拠のある正しさを、いかにも確からしい根拠を示して強引にでも覆（くつがえ）そうとするから。

問5 ――線④「かく」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は29。

ア 「かく」とは「こんなにも」という意味であり、「太陽の没する所が洛陽よりも近い」という、孔子の子どもに教えた答えの正確さを強調している。

イ 「かく」とは「こんなにも」という意味であり、「太陽の出る所は洛陽よりも遠い」という、孔子の子どもに提示した説明の正確さを強調している。

ウ 「かく」とは「このように」という意味であり、「太陽の沈む所と洛陽とはどちらが遠いのか」という、子どもの孔子への質問の内容を指している。

エ 「かく」とは「このように」という意味であり、「太陽の出る所はなぜ洛陽よりも遠いのか」という、子どもの孔子に指摘した疑問点を指している。

問6 ――線⑤「ただ者にはあらぬなりけり」とあるが、「人々」がそのように言い合った理由の説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は30。

ア 子どもに八歳とは思えない威厳を感じて、二の句が継げなくなったから。

イ 孔子の説明を真っ向から否定する子どもを末恐ろしく思ったから。

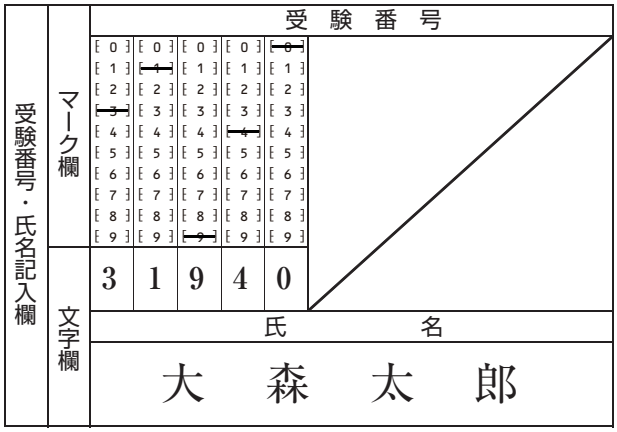
ウ まったく物怖じすることなく孔子に話しかける子どもが無邪気だから。

エ 子どもが対等に渡り合って、その孔子からも一目置かれているから。

解答用紙記入上の注意

受験番号、氏名の記入方法

右の記入例をよく見て正しく記入して下さい。
記入例は３１９４０の場合です。文字欄に受験番号と氏名を記入し、受験番号のマーク欄に線をひいて下さい。



解答欄の記入の仕方

1. 問題は一から三までで１ページから 18 ページにわたって印刷してあります。
2. 問題によって解答群は（ア）から（エ）まで、あるいは（ア）から（コ）までなどさまざまですが、答えは１つしかありません。
3. 各問題の答えは解答用紙に明確にマークしなさい。
4. 問題をよく読んで、解答群の中から、正しいと思う答えの記号を選びます。

   例　次の熟語の読み方の正しい解答を選びなさい。

   会 得（ア．エトク　　イ．アイトク　　ウ．カイトク）

   正しい答えは「ア」ですから、文字欄に（ア）と記入し、「解答マーク欄」に線をひきます。（右記入例参照）
5. 解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。
6. 試験時間は 50 分です。
7. 合図があるまで開かないで下さい。

マークシート記入例